2021/12/05(アドベント第二主日)　七里教会　　最上 光宏

「お言葉どおり成りますように」　ルカによる福音書 1:26-38

アドベントのロウソクに 2 つ火が灯りました。再来週はもうクリスマスです。先週は礼拝の後、みんなで会堂のすす払いをして、クリスマスを迎える準備をいたしました。あとは、私たちの心を整えて、心の深みにイエスさまをお迎えするのみです。

中世の宗教詩人シレシウスの言葉に「たとえキリストがベツレヘムに千たび生まれても、あなたの心の中に生まれなければ、それは虚しい」というのがあります。何度クリスマスを祝っても、あの飼い葉おけに宿られた主が、私たちの心の中に宿らなければ、それは単なる行事としてのクリスマスに過ぎず、主イエスの降誕を本当に祝ったことにならないのです。そういう意味で、このアドベントの日々、心沈めて、み言葉に親しみ、祈りをもって心の深みに、来たり給う主をお迎えしたいと思います。

今日の聖書の箇所は、降誕劇(クリスマスページェント)の第一幕にあたる、マリアの「受胎告知」の場面です。天使ガブリエルがおとめマリアに現れて、主イエスを身ごもるという告知をした有名な場面です。この場面は多くの有名な画家によって描かれ、また多くの音楽家によってマリアの賛歌「アベマリア」として歌われてきました。ローマ・カソリック教会では、このマリアは「聖母マリア」として礼拝の対象にすらされました。　ですから、あのマルチン・ルターも、修道院に入る前、旅の途中で激しい雷雨に見舞われたとき、雷に打たれて死ぬのではないかという恐怖の中で、思わず「聖母マリアさま、おたすけください」と祈り、「助かったらこの命を神さまに捧げます」と誓ったのです。彼はその誓いを果たすために、修道院に入ったと言われています。

マリアは、それほどまでに当時の人々から敬われ崇められていたのです。ですから、絵画で見るマリアの姿はみな神々しく、大抵、光の環を被った姿で描かれています。

しかし、聖書に描かれているマリアの実像は、決してそのような理想化され、神格されたものではなく、私たちとあまり違わない、ごく普通の、一般的な女性として描かれているのです。

今日のこのルカによる福音書 1 章 26 節以下の記事によると、このマリアは、ガリラヤのナザレという町に住んでいたことになっています。ガリラヤはユダヤの北のはずれにある辺境の地で、「異邦人のガリラヤ」と呼ばれていた地域でした。その中でもナザレという町は、「ナザレからなんの良いものが出ようか」と言われるほど、見栄えのしない不毛の地とみなされていた地域です。マリアは、その小さな町の平凡な 14,5 歳の娘でした。興味深いことに、ルターは、後の説教の中で、このマリアを「ごく普通の田舎娘」と呼び、彼女は「虐げられた人々の中でも、最も卑しい者の一人でした」と綴

っています。その根拠として挙げていることの一つとして、「マリア」という名は、ヘブライ語の「ミリアム」(苦い没薬)という意味で、マリアの生い立ちが貧しく苦しい境遇にあったことを意味すると説いています。このことは、かつてルターが修道院に入る前、「おお聖母マリア様」と祈り、献身を誓った当時のマリアに対する見方と、ずいぶん大きく違っていることを思わされます。この大きな変化の中にも、「宗教改革」がもたらした大きな変革のあとを見る思いがいたします。ルターは、マリアを神格化して崇めるという立場から、聖書を通して、マリアは自分たちと同じ悩みや苦しみを担った平凡な人間であることを認め、神さまはそのような弱く惨めな人間を通して、驚くべき大きな御業をなさった、という神さまの御業に注目し、強調したのです。

神さまがマリアを選ばれたのは、マリアの身分や地位によるものではなく、彼女の特別な才能や能力によるものでもなく、また、その性格や信仰によるものでさえなく、神さまの一方的な憐れみと恵みによるものでした。　パウロはコリントの信徒への手紙(1)の中で、「兄弟たち、あなたがたが召された時のことを、思い起してみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄の良い者が多かったわけでもありません。ところが神は、知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。…」(1:26-27)と述べています。神さまは無きに等しい「いと小さき者」を敢えて選ばれるのです。それはだれも誇ることがないためです。マリアはそのようにして神の一方的な愛と恵みによって選ばれたのです。

そのマリアのもとに、天の使いが遣わされて、「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられます」と語ったのです(28)。マリアはこの言葉に戸惑い、一体この挨拶は何のことかと考え込んだのです。いきなり「おめでとう」と言われても、何がおめでたいのか、見当がつきません。「恵まれた方」と言われても、今まで、貧しく惨めな生活を送って来た彼女にとって、自分の不幸せを嘆くことはあっても、自分が恵まれているなどと、一度も思ったことはなかったかもしれません。いわんや、「主が共におられる」などということを一度も感じたこともなかったと思います。そのような若い彼女にとって、天使の声は、とても自分に対する言葉とは、信じられなかったのです。途方に暮れ、戸惑うマリアに、み使いは再び声をかけたのです。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みを頂いた」(30)と。マリアは恐れたのです。自分のような者に、神のみ使いが現れ、声をかけられたこと自体大きな驚きであり、恐れであるのに、自分のようなものに神の恵みが与えられ、主が共におられるということに、身が震えるほどの恐れに満たされたにちがいありません。

現代の私たちにとって、「天使」の存在はあまりピンと来ないかも知れませんが、「天

使」はギリシャ語で「アンゲロス」といって「遣わされた者」という意味です。神さまは直接人に語り掛ける場合もありますが、様々な人やもの、出来事などを通して、私たちに語りかけ、御心を示されるのです。私たちは普段、この世の多くのことに心を奪われ、さまざまなことで思い煩っていることが多いために、主が遣わされる「アンゲロス」に気づかず、主が語りかけておられるみ言葉を聞き逃していることが多いのですが、主は、いつも私たちと「共にいてくださる」のです。マリアはそのことに気づき、「み使い」をとおして、神の声を聞き、神に語りかけることが出来たのです。

「恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた」。天の使いはこう語られた後、驚くべきことをマリアに告げました。「あなたは身ごもって男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き神の子と呼ばれる…」(31,32)。それは、神の御子イエス・キリストを身ごもり、出産するという予告でした。マリアの驚きは、どれほどのものであったか分かりません。「どうして、そのようなことがあり得ましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」。マリアには、ヨセフという名の許嫁(いいなずけ)がおりましたがまだ一緒になっていません。男の人を知らない彼女が受胎し、出産するわけがありません。マリアの驚きは当然のことです。しかし、それ以上に驚くべきことは、その受胎が、神の御子を宿すという神さまの御業であるということです。しかし、マリアにはそこにまで思いを馳せる余裕がなかったようです。そこで、み使いはさらにこう告げたのです。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」(35)と。マリアの受胎は、聖霊による神の御業であって、生まれる子は「聖なる神の子」であると。そして最後にみ使いは告げたのです。「神に出来ないことは何一つない」(37)と。

「処女降誕」ということは、いつの時代でも問題になってきたことです。私たちが一般的な常識や科学的な知識だけに囚われている限り、これは理解できない神秘だと思います。私も、かつてはそんなことがあるものか、と思っていました。しかし聖書を通して神さまのことを知り、イエスさまとの出会いを通して、「神に出来ないことは何一つない」というこのみ使いの告げた言葉は、本当にそうだと、受け入れられるようになりました。神さまのなさることは、私たちの思いをはるかに超えているのです。

私たちは、普段、自分で理解し、納得できることだけを「真理」として受け入れ、それを絶対的なものとするけれども、そうでないものは「想定外」のものとて排除し、受け入れようとしない傾向があるのではないかと思います。ですから、10 年前の東日本大震災以来のときにも、あれほどの強い地震が起こるとは思はなかった。あれほどの津波は「想定外」であったという言い方をします。今の新型コロナ・ウイルスの世界的蔓延にしてもそうですが、これまで経験したことや、想定したことのみが真理ではな

いのです。私たちは常に、自分たちの経験や、知識によって想定し得ることは、「真理」の一部ではあっても、すべてではないことを謙虚に認めなければならないのです。「想定外」の神の真理、神の真実があるのです。

ヨハネ福音書の中に「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(3:16)とのみ言葉がありますが、「独り子をお与えになる愛」は、それこそ「想定外の愛」です。そのような愛の業を、神さまはマリアを通してお示しになったのです。

「どうして、そのようなことがありえましょうか」と、いぶかるマリアにみ使いは、「あなたの親戚エリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている」という身近な例まで示して、「神に出来ないことは何一つない」と言われたのです。

そのようなやり取りの末に、マリアは 38 節で、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」と答えたのです。

この「はしため」という言葉は、「身分の低い女中」という意味です。マリアは単に自分を卑下したり、自分の生い立ちを嘆いて、こう言っているのではありません。神さまの大きな愛の御業の前に、恐れおののきつつ、自らの小ささを言い表した言葉であり、生涯「主に仕える僕です」という告白でした。　当時、未婚の娘が子を身ごもるということは、単に世間体悪いというようなことだけではなく、「姦淫」とみなされ、石打ちの刑をも覚悟しなければならないことでした。婚約者のヨセフに理解してもらえるかどうかという不安もありました。そのような困難を承知の上で、マリアは「お言葉どおり、この身になりますように」と、すべてを主の御手に委ねたのです。マリアの凄さは、このような、主なる神への信頼と服従です。一切の思い煩いを捨てて、ひたすら主に従う一途さです。

「お言葉どおりこの身になりますように」。御子イエス・キリストはこのようにして聖霊によって、乙女マリアより生まれ、私たちの救いのために、この世に来られたのです。　「お言葉どおりこの身になりますように」。興味深いことに、マリアのこの祈りを、主イエスもまたその生涯の終わりに、十字架の死を前にして、ゲッセマネで祈られました。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」(ルカ 22:42)と。主イエス・キリストもまた、父なる神の御心行うためにこの世に来られ、み心に従って十字架において尊い命を捧げられたのです。私たちに命を得させるためです。

私たちも、心の深みに主イエス・キリストを宿し、「お言葉どおり、この身になりますように」と、主に従う歩みを貫き通したいと心から願います。　　アーメン